

上井久義著『琉球の宗教と古代の親族
〈上井久義著作集 第六巻〉』
清文堂, 2005年2月刊, 307頁, 6,090円

新里 喜宣

本書は、第一部「琉球の民俗宗教」と第二部「親族の構成」の二部構成からなる上井久義氏（現在、関西大学名誉教授、葛城市歴史博物館館長）の論文集である。第一部では琉球の民俗宗教に関する論考を七本、第二部では古代親族の構成に関する論考を六本掲載している。主に一九八〇年代・九〇年代に発表された論考が中心となっている。一見すると関連の薄いテーマが二つ並んでいるように見えるが、民俗宗教の基層を考察する場合、その社会の親族構造が大きく関わっているというのが著者の主張したいことであり、多くの文献資料、民俗誌、加えてフィールド調査に基づく具体的検証を駆使することによって論を展開している。そこが本書、ひいては著者の論の特徴と言えるだろう。また、著者は様々な方法論を駆使して論を展開しており、特に民俗学と史学、その親縁関係を主張しているところに方法論的な独自性が見受けられる。それは本書のみならず、全七巻において一貫していることである。

琉球の民俗宗教に関して、従来の研究では親族構造との関連を探ることはあまり成されてこなかった。それは、信仰や儀礼に主に関心が寄せられてきたことや、その歴史的な蓄積や変化を見逃していたことによると考えられる。今日、実に多様な様相を呈している沖縄の宗教を考えるためにも、今一度その基層を探り、琉球の民俗宗教が如何にして親族構造と関わってきたかを考える必要があるだろう。

では、本書の内容に入る前に、著者の仕事の中でのその位置付けを確認しておきたい。本書は著作集第六巻であり、その他の巻は以下のとおりである。

第一巻	『民俗宗教の基調』	2006年1月刊
第二巻	『宮座儀礼と司祭者』	2005年4月刊
第三巻	『女性司祭と祭儀』	2006年10月刊
第四巻	『民俗社会の構成と葬墓』	2006年7月刊
第五巻	『農耕・物忌・祖先祭』	2005年8月刊
第七巻	『民俗学への誘い』	2007年2月刊

著者の主な関心は民俗宗教にあると思われる。しかし、研究対象としては祖先祭祀、葬墓制、

宮座、司祭者など多岐に渡っている。本書は著者の研究において、中心的なテーマの一つである女性司祭に関わる重要な論考が多く含まれており、一書にまとめて読むことで、琉球の聖所や神女組織には親族組織が大きく関わっていることが明らかになる構成になっている。評者の印象としては、本書は主に第一部で琉球の宗教について集中的に論じ、続いて第一部の内容に更に説得力を持たせるために第二部を構成していると思われる。よって、まず第一部の内容を概観し、それに対して評する事にする。続いて、第二部の内容を概観し、その後本書の内容に対して評していきたいと思う。

まず、第一部「琉球の民俗宗教」の内容を概観していく。第一章「聖所と親族」では、南西諸島において社に相当する御嶽と集落の関係が問題とされている。集落における共同体の形成により、他の親族集団との開かれた関係を築くことになり親族組織の系譜単位における厳重な区分が意義を失っていく。そして、その影響のため親族単位の祖霊たちは萎縮していくことになり、代わりに村落共同体の守護神がその神威を増していくことになるとする。この論考において著者は、Paul Radin (1883-1959) や Claude Levi-Strauss (1908-) の調査実績を引き合いに出しつつ、南西諸島のみならずオーストラリアの西北部原住民カリエラ族や兵庫県中部の大敷部落など、様々な事例を取り上げることにより、集落をとらえる際には住民の観念的な集落像を通して村の姿を見ることが重要であると指摘している。

第二章「琉球の聖観念セジとマブイ」では、まず日本における聖観念の多様性を挙げ、それが一層論理を複雑にしてしまい、結果的に理解しがたい思想体系にそれらを押しやってしまったと指摘する。そこで、日本と共通の文化的基盤に立つと一般に考えられている琉球において、どのような聖観念が見られるかということに着目することにより、その再考を促す。御嶽や、琉球の巫女としてその古形を伝えるノロやユタの思想的背景として、セジとマブイを挙げる。一般に、セジは靈力を、マブイは靈魂を表すとされてきたが、著者はその説に疑問を投げかける。著者は、沖縄各地のフィールド調査や琉球における古典的な思想を織り込んだ『おもしろさうし¹⁾』に記載された事例などを活用することにより、元々、セジは靈力を示すのではなく、俗人の意味を表していたとする。セジは、古来においては日本語の「筋」に相当し、血筋を意味していた。それが、オナリ神信仰、そして聞得大君を頂点とした神女組織のセジを強調し始めたときに、そのセジの神聖性が強調され、セジが神という思想にまで発達した。しかし、歴史的な変動により女神官組織が変動し、彼女らの宗教的靈力の低下と共に、セジの神聖性が低下してしまう結果となる。そして、セジの神聖性の低下により、女神官がセジを守り込めることで守護するという形式をユタなどが受け継ぐことになる。守護のために何かを「マモリコメル」ことが、やがて近世以降使われるようになった「マブイ」の語を生み出し、靈力的なものの名称として一般化していったとする。ユタの活動にマブイが取り入れられることにより、それが民間信仰の世界に定着し、マブイが靈魂を意味するようになる。そして、セジの神聖性は低下したが、靈力という意味で古形を一部残すことになるとする。著者は最後に、親族組織の歴史的な変動が聖観念の一側面を生成し、また再構成を促す結果となると指摘する。この指摘は著者の基本的なスタンスを的確に示しており、聖観念を考察する場合、社会組織構造の歴史的な変動を考慮に入れなければ、それを理解することはできないということを主張していると考えられる。

第三章「先島の聖地と祭祀」では、主に八重山諸島と奄美諸島での調査を基に、琉球の民俗宗教の古層を再構成することを試みている。著者は、民俗宗教を考察する場合、聖地と、司祭者と、祭祀儀礼の三つの領域に分けて取り上げることができるとし、本章では主に司祭者を取り上げ、儀礼が南西諸島においてどのような社会集団において執り行われていたのかを論ずる。本章では、南西諸島において宮座のような組織が存在したことを指摘していることが興味深い。論旨としては、祭祀集団の中でただ一人男性神役が存在したことを指摘し、その職の継承が宮座の継承、つまり男子の直系相続によって継承されることと同様であるとする。南西諸島において男性司祭者と比較して女性司祭者の伝承が色濃く見られるのは、近世的な支配形態が解消されて男性による村落の運営機構が解体されたが、女性司祭者による村落祭祀の運営体はその後継承されていたためとしている。

第四章「御嶽の神役」では、従来の研究において、ノロのような女性神役が主に注目されてきたことを受け、前章と関連づけながら男性神役の再考を促す。具体的な事例として、久高島のイザイホウにおいて行われる一連の儀礼に着目する。イザイホウは従来の見解として、新たに巫女となる者の資格試験であると理解されてきたが、これはイザイホウの一側面でしかないとし、この女の祭りが男の祭りと一対となっていて行われていることを挙げ、そこから再考の必要性を強調する。イザイホウと対で行われる男の祭り（ナーリキ）は、男性に久高島の一成人として認知を授ける儀礼であるのに対して、イザイホウは女性に久高島の一主婦として認知を授ける儀礼であったのではないかと主張する。つまり、イザイホウは従来女性が巫女になる儀礼として見られていたが、むしろ女性が帰属する社会集団のスジを明示する手続きであると理解している。また、父系親族集団「門中」が聖地を巡拝する「東廻り」や、ノロ就任儀式として首里を訪れるといった一連の儀礼も、男性の神役が関わっていることから、再考の余地があることを指摘する。前章が一九八四年、本章は一九九五年に発表された論文であるが、相互の関連から著者の一貫した着眼点を伺うことができる内容となっている。

第五章「琉球の王と神女」では、聞得大君を中心とした巫女組織設立の問題が取り上げられている。『おもろさうし』第一巻には、特定の王（尚真）を歌いこんだおもろがあり、その他のおもろには特定の王を歌った記述は見当たらないことに着目する。尚真は第二尚王統二代目の王であり、斎場御嶽を聖地に位置づけた。その第一尚王統を受け継いだ第二尚王統の立場を確立すると共に、聞得大君制の確立と結びついて政権の基盤を確固たるものにする意図があったのではないかと指摘している。

第六章「琉球の女帝」では、聞得大君制の設立には、第二尚王統初代の王尚円の妃、月光の意図が大きく関わっていると主張する。本章も、前章と同様に女神官への考察から始まる。琉球王国時代、特に第二王統における月光の影響力の大きさの指摘に始まり、王権の親族構造に関して論じていく。注目すべきは、従来の研究では見落としがちであった親族構造から聞得大君制を考察するという視点を著者が投げかけていることであろう。ここから、尚王統が聞得大君制を設立したことも、尚円と月光に連なる親族の権力基盤を確固たるものにするためであったとする。また、次章においても月光を取り上げており、琉球王国における巫女組織の設立に関する問題において、著者はこの月光に最も関心を寄せていることがわかる。月光は女神官であり、特に王の即位儀礼でその影響力を行使した人物である。そして、尚王統の親族構造における彼女の立場、そ

して彼女の血筋に連なる親族の立場を確固たるものにしようとして聞得大君制を設立したのではないかとする。

第七章「琉球の宗教と尚圓王妃」では、『李朝実録²⁾』に収められた琉球への漂着民の体験談を基に、琉球王国の外交事情から第二尚王統尚円の妃である月光へ関心が注がれている。第五章・第六章では、主に聞得大君を中心とした巫女組織への関心から王妃である月光へ関心が向けられていたのに対して、本章では琉球の外交事情を中心として月光を考察している点が興味深い。本章で中心的に論じられていることは、琉球の伝統的な宗廟様式を継ぐ首里玉陵と、仏教による宗教施設としての宗廟という形態の形式化は、史料の面では王である尚真の発案とされているが、著者の見解では尚真の母である月光の願うところであったとしている。それを対外関係、主に朝鮮や対馬の資料から読み解いている。

第一部の中心的な構成は以上である。各論考はそれぞれ独立のテーマを扱っているが、著者の着眼点は一貫している。著者の最も主張したいことは、民俗宗教の基層、それには親族構造が大きく関わっていることである。評者としては、親族構造から民俗宗教の基層を探ることに関しては本書は成功していると思う。しかし、現代との関連においては多少問題があると思う。例えば、第四章において、父系親族集団「門中」が定期的に聖地を巡拝する「東廻り」に関して、その起源を巡る論の展開は非常に説得力があり納得できる内容となっている。しかし、現在の門中に対する考察において、「東御廻りの目的が、焦点の定まらない巡拝になってしまったと考えられる(九十五頁)」とするのは納得がいかない。沖縄において門中の形成が始まったのは十七世紀以降であり、初めは主に首里・那覇の士族が中心として形成された。しかし、その後地方にも広まり、士族でない親族集団もいわゆる「士族化」の波に飲まれる事になる。その為、現在では門中も地方によって多様な形態を示しており、一概に捉えることはできないだろう。そのような状況の中で行われる集団的儀礼を意味の無いものとして位置付けてよいものであろうか。著者の論においては現在の門中に対する考察が不足しているように思えた。歴史的な推移を辿り、その源泉を理解することは当然のことながら必要である。しかし、それを押さえて現代に適用する作業こそ重要であろう。この一連の作業において不満の残る内容となっている。

また、第一部の構成においても多少問題があるように思う。本書は論文集である以上、各章の関連が若干薄れることは避け難いことは理解できるが、一つ例を挙げて指摘しておきたい。ここで問題としたいのは、第五章と第六章である。両章は共に聞得大君制の確立の時代を扱っている。しかし、両章がどのように絡んでいるのかという記述が見られないのが非常に悔やまれる。恐らく、聞得大君制を設立した経緯を示したのが第六章で、その確立を示したのが第五章であろうが、著者自身がこの経緯を包括的に述べる必要があるだろう。包括的に論ずることで本書はより説得力を持つことができると思うが、その点は多少不満が残るところである。

続いて、第二部「親族の構成」の内容を概観していく。第二部は文化人類学の方法論を使って、古代の日本や中国・朝鮮半島の親族組織を考察した論考六本を収めている。

第一章「系譜と権限」では、「父系」や「母系」という概念では、その社会を捉えられないという主張が中心となっている。父系であるから「父権的」であり、母系であるから「母権的」で

あるとは限らないとし、「系譜」と「権限」とは概念の異なるものとして扱うことを促すものである。具体的な事例として、琉球におけるオナリ神信仰をあげる。これは、姉妹を兄弟の守護神とする東南アジアに分布する信仰に根ざしている。著者は、琉球は父系制社会であるとする。しかし、すべての権限を男性におくのではなく、行政的権限は男性に、宗教的権限は女性に分割した姿であるとし、これは権力の均衡を意味しているとする。また、本章以降の特徴として、婚姻儀礼に大いに着目している点が挙げられよう。著者の主張としては、従来の研究においては婚姻儀礼で行われる慣行をそのまま受け入れ、それによって父系や母系として捉えようとする傾向があったとする。しかし、本章においては、婚姻における双方の親族の系譜や権限こそ儀礼の場において重要だとする。例えば、婿入り婚が存在するからといって母系的だと決めることはできないとし、家父長的であるゆえに婿入り婚の儀礼の方がより重視されたと示唆している点は興味深い。

第二章「姻族の紐帯」では、中国の北部や東南アジアの少数民族の事例を基に古代社会の親族構造を考察している。著者はこの論考を日本の社会組織を考察する上での手がかりを探るものとして位置づけ、構造人類学の交叉イトコ婚の分析法を用いて各親族の関係は女性が一方通行的に嫁ぐことにより姻族の紐帯を成し、環状につながっているとする。そして、各親族の標識としてトーテムを捉え、それを朝鮮や中国、東南アジアの事例に適用していく。

第三章「姻族の伝承と戸籍」では、問題提起として、古代社会の氏族の個別研究においては精力的にその解明がなされてきたが、その親族組織や姻族関係に関する研究はあまりなされていないとし、一つの指針として三輪や賀茂伝説を取り上げる。ある一つの氏族には、祖先の系譜を語る縦の神話と、姻族の関係を語る横の神話、その二つが同時に存在することに意味があり、社会構成の縦と横の関係で説明付けることができるとする。これは神話を機能論的に捉えた見解である。そして、その検証のために戸籍を用いる。戸籍上にもその姻族の伝承を伝える要素が大いに見受けられる。従来、神話において妻問婚の形態がみられることから母系制社会の反映だとする見方があったが、著者はこれに疑問を投げかけ、姻族の関係を読み解いていくと実は父系制社会であるがゆえに女性の存在が姻族との関係において重要な要素になったとし、姻族関係を検討することの重要性を論じる。

第四章「秦氏と鴨氏の連繫」では、前章と同様に父系や母系という概念では古代の親族構造を捉えることはできないとし、前章でも扱った秦氏と鴨氏の姻族関係と氏族伝承などを詳細に検討する。前章との主な違いは、なぜ二つの氏族が互いの関係を説明付ける出自伝承を持たなければならないのか、その点に対する説明に終始していることであろう。ここでは、本来姻族でない氏族同士が互いに姻族の関係を保って世代を重ねて行くために、これを説明付けるための出自伝承を双方が持たなければならなくなったとしている。

第五章「桂と鳥と斎王と」では、秦氏と鴨氏、そして卜部氏が一つの祭礼を連携して行うことに果たしてどのような意味があったのかということに関心が注がれている。ここで著者が主張したいことは、神事と説明説話の関係は、説明説話に沿って神事が成されるのではなく、現存する神事を説明するために説明説話、つまり神話が形成されるということである。

第六章「古代の親族名称」では、親族名称に着目し、それが親族の構成に大きな意味を持っているとする。本章では主にインセスト・タブーに注目し、婚姻が禁止される者と配偶者の対象に

なる者とは親族呼称が異なることを指摘する。ここから琉球のオナリ神信仰の起源に遡る。オナリというのは、兄弟に対して姉妹の靈的優位を認め兄弟の守護神とする信仰である。しかし著者は、オナリというのは元々は近親相姦を禁止するための呼称であるとしている点が非常に興味深い。古来より近親相姦は厳しく禁じられてきた。琉球もその例外ではなく、兄弟から見て姉妹をオナリと呼ぶのは、それが結婚できない相手と認識する一つの標識であったとするのである。そして、オナリ神である姉妹を兄弟にとって神であるとしてお互いを位置づけることは機能的に有効であったとしている。

以上が第二部の構成である。主に文化人類学の方法論を用いて古代の親族構造を分析し、最後に再び琉球の親族、民俗宗教に立ち戻っている。第二部は構成として、第一部で論じたことに更に説得力を持つように掲載されたと思われる。そして、最後に「古代の親族名称」を掲載することで、二部構成の関連を強化したといえるだろう。ここで、全体の内容に関して評していきたいと思う。

本書の全体を通読すると、琉球の宗教と古代の親族構造という、さほど強い繋がりが無いように見える二つの領域が、相互に密接に関連していることが十分に納得される。そこにこそ本書の高い功績がある。また、方法論の面でも興味深く、主に第一部では民俗史学、第二部では文化人類学の方法論を用いている点は注目に値する。本書の意義として最も重要な点は、現在多様な形態を示す沖縄の宗教的儀礼や親族構造の源泉を探ることにあると思われる。評者の研究対象であるユタを中心として捉えた沖縄の民俗宗教にしても、地域ごとに多様な様相を呈している。そこが沖縄を扱う上で最も難しい点の一つであり、今一度その民俗宗教の基層とは何であるのかを問う姿勢は十分に見習いたいと思う。

しかし、本書には幾つかの問題点もあるように思われる。評者の印象としては、本書を通読して琉球の宗教についての理解が深まったとは思えない。確かに、琉球の宗教という場合、聞得大君を中心とした巫女組織の成立に関わる様々な経緯を明らかにした本書は意義深いものがある。しかし、その経緯を明らかにしたとはいえ、それが琉球の宗教の全てではない。また、神女組織においても聞得大君は確かに中心ではあるがその全体ではなく、従って全体像が今ひとつ見えない内容となっている。恐らくこれは、琉球王朝それ自体に著者の関心が注がれている為であると思う。琉球と一言で表しても、その形態は古来より多種多様であったと考えられる。従って、巫女組織の形成を探ることのみでは不十分なのではないか。例えば、評者の研究対象であるユタはどうだろうか。ユタも神女組織の代表であるノロと同様に古来より存在しており、ノロが一般に「表の文化」の代表者と言えるのであれば、ユタは「裏の文化」、つまり民間に根ざした信仰の代表者といえるだろう。聞得大君制の確立にしてもそれが民間にどのような意味があったのか、その視点が欠けているように思えた。評者自身も、琉球王朝時代から連続と続く沖縄の民俗宗教を扱う者としてそれが如何に困難であるかは了承するところであるが、その点に関して多少不満が残る。

そして、現代との接続点が見えないことが本書最大の弱点であろう。言い換えれば、古層の解明にはある程度成功しているが現代に対する分析がない、または現代に対する分析が甘いという意味である。例えば、第一部のまとめで述べたことではあるが、首里の「東廻り」や現代の親族

呼称、それらは古代においては意味のあるものであったが現代においては意味のない慣行的なものになってしまったと著者が指摘している点である。評者はここに大きな問題があると感じた。当然のことながら、評者は現代においてそれらに意味があると断ずるつもりはない。しかし、意味がないと判断することも問題であろう。適格な判断を下すには、それなりの調査と分析が必要であることを主張したいのである。また、本書が現在の沖縄の民俗宗教や親族構造とどのように関係しているのかという事に関して考えた場合、聞得大君制を扱う理由が今ひとつ見当たらない。公的祭祀を扱うノロなどの神女は、現在の沖縄において殆ど影響力はないといえる。その代わりに民間に根ざしてきたユタ等の巫女が民俗信仰の担い手と言われる昨今の現状において、著者の論をどのように適用したらよいか。その点に関する指摘を含んだ構成にすれば、本書は沖縄の宗教のみならず日本や中国・朝鮮、東アジアの宗教や親族構造を学ぶものにとって非常に意義ある一冊となりえるだろう。

しかし、以上のことを考慮しても、本書が民俗宗教と親族構造の関係を学ぶ研究者のみならず、古代の文化や琉球の歴史に関心を寄せる一般の読者にとっても読む価値のある一冊であることは再度強調しておきたいところである。

註

- (1) 外間守善校注『おもろさうし』岩波文庫、二〇〇〇年。
- (2) 「李朝実録抄」『日本庶民生活資料集成』第二七巻・三国交流誌、三一書房、一九八一年。